

## 「大腸がんの症状」

大腸がんは、がんそのものが症状を起こすことはありません。内視鏡検査で発見される大腸がんの患者さんのほとんどが無症状です。特に早期のものは症状がありません。

しかし、がんが進行して大きくなると排便習慣に影響が出る場合があります。便の通過を邪魔して便秘になったり、逆にがんの表面から粘液が滲み出て下痢になったりすることもあります。便秘と下痢を繰り返すこともありますし、その他、便が細くなる、残便感、腹痛などがあります。特にS状結腸、直腸など肛門に近い部位での大腸がんではこのような症状が起こりやすいと言われています。また、今まで便秘したことがなかったのに便秘傾向となった、また下痢傾向となった、など排便習慣の傾向に変化が起きた時も注意が必要です。これらが続くときは専門医を受診しましょう。

盲腸、上行結腸、横行結腸など奥の方の大腸ではお腹にしこりが触れることもあります。

体重が減ったり、微熱が続いたりすることもあります。

しかし、大腸がんのもっとも特徴的な症状は血便、紙に血がつくなどの出血症状です。痔だと思って様子を見ていたら大腸がんが発見された、という患者さんは医療機関では日常的にいらっしゃいます。

症状がなかったとしても、健康診断などで便潜血検査が陽性となったときは要注意です。便潜血陽性の患者さんのうち大腸内視鏡検査を受けて大腸がんが見つかるのは全体で2-3%ほどですが、内視鏡検査を全く受けたことがない便潜血陽性の患者さんからは5-7%で大腸がんが見つかると言われています。便潜血検査が陽性となったときは必ず専門医を受診しましょう。それから血液検査で貧血が進んでいる、と言われたときも注意が必要です。盲腸、上行結腸、横行結腸など奥の方の大腸にがんが発見されることがあります。

大腸がんの危険因子は喫煙、糖尿病、ご兄弟・ご両親に大腸がんの人がいること、65歳以上などです。このような方は特に注意が必要です。